

福島県双葉郡川内村は、福島第一原発から三十キロ圏内にある山間の村。震災直後、すべての人々が村外への避難を余儀なくされました。その後、村内の放射線の線量が比較的低いことがわかり、二〇一二年一月、いち早く「帰村宣言」を行い、復興に向かって動き始めています。

「川内村は本当に美しい村ですよ。特に春は村全体が川のせせらぎで満たされる、風光明媚な山里です」。目を輝かせて村のことを語る折田真紀子さん。しかし、彼女は村の女性ではありません。長崎出身、長崎大学医学部保健学科で学び、現在、放射線保健医療の大学院生。保健師の資格を持っており、昨年四月に川内村に設置された「長崎大学川内村復興推進拠点」に常駐する職員でもあります。

「震災以降、山下俊一先生や高村昇先生が福島県の放射線健康リスク管理アドバイザーとなり、川内村にも土壌の調査や甲状腺検査などが入られていました。村の方々と信頼関係が築かれ、長崎大学ならというこ



村の人々に放射線の数値を説明する折田さん。

## 拠点には常駐職員が一人 それは保健師でもある 大学院生



折田さん(写真)が村で採取した土やキノコのサンプルは、長大本キャンパスにある原研のRIセンターに持ち込まれ、より精度の高い放射線測定機で測定されます。

とで、大学の拠点に、公民館の一角をお借りすることができたのです。高村先生に、この常駐職員をやってみないかと言われ「ぜひやります！」とお受けしました。拠点の活動は主に、土壌や飲み水の線量の環境評価と、その値をもとにした住民の健康相談です。

線量データをもとにした健康相談というところ？

「今は線量のデータは山のようにあるんですね。みなさん測りますから。ところがそれを住民のために説明できる人がいないんです。村に住

み、身の回りの相談に応じながら、放射線量の測定を求められればすぐ測り、その数値について解説するのが仕事です」。

例えば「長く空けていた家の家具は汚染されていないか?」「食品の放射線測定結果の「ND」とは? (ND:検知されず)」「子どもが虫をさわっても大丈夫か」など、確かに放射線は目に見えないだけに不安は募りますね。

「日々の生活のなかで浮かんだ疑問や不安を気軽に相談できる、行政サービスのような位置づけです」。

折田さんは一度社会に出た後、放射線保健医療を学びなおすために長崎大学の修士課程に入ったそうですが、それが震災直後だったんですね。「研究室を訪れると、先生方は全員福島現場に行つた後でした。私もすぐに駆けつけ、ベクレルとシーベルトの違い、一ミリシーベルトという値の意味、すべて現場で叩き込まれました。先輩の吉田浩二さんと中島香菜美さんは福島医大で緊急被ばくの医療スタッフとして活躍されていますし(P11)、逆に福島医大から長崎に来て放射線を学んだ方もおられます。今後、こういったプロは、被災地以外でも必要とされるでしょう。保健医療の教育現場で教えられる人材の育成も急務です」。

確かに、これからの社会や医療の場において、放射線についての正しい知識は必要不可欠なものです。

「一昨年、この村の稲で放射性物質の数値がどのくらい出るのかを測るために「実証田」を設けて稲を作ったのですが、結果は基準値以下でした。稲作ができるということは、村にとつて大きな喜びです」。

## 体操や食事指導の先に目標を 保健学科の高齢者支援

この拠点を中心に川内村で医学部保健学科が昨年度から行っているのが、高齢者支援。先生方が三、四人ずつのチームとなって、月に一回村に入っています。井口茂准教授に聞きました。

「昨年の七月から始めた健康サポート養成講座では、婦人会の方などの村の地域支援者を対象に、介護予防や認知症予防の知識や実践を体験してもらっています。また高齢者クラブは、村で暮らす高齢者自身の生

活改善を目的としていて、サポート養成講座とともに取り組みの柱となっています。大きな特徴は、みんなが村の将来を考え、目標をたてること。例えば農業でいえば、畑まで歩いて行こう、畑仕事のために足腰を鍛えよう、集団で農作業のできる仕組みを作ろう、といった目標に行動をつなげます。これは、単に体操しましょうという呼びかけより強い。私たちのやっていることは介護予防ですが、広い意味では、コミュニ

ニティの再構築のお手伝いとも言えますね」。

急速に進む高齢化への対策は、まずは、村の人々のモチベーションアップが糸口といえます。

支援メニューは今年度も継続して行なわれるそうですね。

「今後は、クラブに出てこれられない方々を訪問することも必要でしょう。また、子どもとその保護者の健康相談に対応できるカウンセリングの体制づくりを準備中です」。

左から作業療法学の中根秀之教授、理学療法学の井口茂准教授、看護学の中尾理恵子准教授、作業療法学の田中浩二助教。「村の田んぼに水を張るとカエルが鳴く。その声を実感すると、あるお年寄りが笑顔で語ってくれました」と井口先生。



## 長崎の平和教育とドツキング 教育学部が関わる復興子ども教室

村の将来を担う子どもたちが、被災体験を乗り越え、地域の復興や社会に貢献する「強さ」と、「いのち」を大切に育てることを目指している。プログラム「復興子ども教室」は、川内村と長崎大学、川内村教育委員会が共催して昨年度から実施しています。内容には、村の歴史や放射線基礎知識のほか、教育学部の学生による長崎の平和教育が組み込まれています。携わった全炳徳教授は語ります。

「まず、長崎が原爆からどのように復興していったのかを調べることから始まりました。六十年かけて国際観光都市に発展してきた長崎の動きが、川内村の復興のヒントになるのではないかと。昨年十二月には子どもたちが長崎に来て、復興の様子を検証し、そこから村の未来を思い描くプロセスもありました」。

先日行われた発表会でも、村の復興にむけた夢やアイデアが提案され

ています。「私たちにどうも復興史をふりかえるきっかけになりました。しかし主役は子どもたち。今回はメディアや周囲の大人たちに注目され過ぎて、彼らの本音や、声にならない声が出せなかったという反省点も学生から出されました。彼らの求めるものは何なのか。今後学習の後押しなどで、私たちが関わっていききたいですね」。



子どもたちが考えた未来の川内村マップ

拠点ができたことで、大学の活動の幅は飛躍的に広がりました。リスクコミュニケーション、高齢化への対策、教育。さまざまな課題に向けて各学部が動きだしています。

# 川内村に長崎大学の拠点が誕生



# 「川内村に戻りたい」

## その一言が始まりだった



福島県双葉郡川内村

### 遠藤雄幸 村長

えんどうゆうこう。平成十六年四月より川内村長に就任。三期目。現在、福島県水源林造林推進協議会長、(財)ふくしま市町村建設支援機構理事、(社)川内村社会福祉協議会長、川内村体育協会会長も兼任。原発事故の際、避難を余儀なくされたが、「昨年一月、どこよりも早い」帰村宣言を行い、話題となる。

そもそも、長崎大学と川内村のおつきあいは、川内村の遠藤雄幸村長と高村先生の出会いがきっかけでした。遠藤村長は語ります。

「震災後、しばらくは大きな会場でのリスクコミュニケーションの講演が持たれていました。山下俊一先生も講演されていましたが、一部で

「長引く避難生活は特に高齢者には辛いものです。『村に戻りたい。どうせ死ぬならば自分の家で』という声も多く出始めたころでした。実際、仮設住宅での生活による深刻なストレスを考えると、村に戻って生活環境を整えていくことで健康的な暮らしを取り戻すこともできるでしょう。その願いを聞き入れて、

二カ月後には、先生方は村に入ってあちらこちらの土壌や食べ物の線量を測ってくれたのです。本当に助かりましたね。その結果、村の放射線量がかなり低いこと、特に役場や学校のある中心部の上川内地区は十分生活できることがわかりました。帰村が可能であることを科学的に証明したんですね。そして二〇一二年一月、どこよりも早い「帰村宣言」へ。

「はい。本当は、村人みんな一緒に戻りたかった！ あるいはいつまでにと期限を決めて。しかしやり始めて、それには難しい問題もあることがわかってきました。特に子どものいる家庭や女性は慎重です。そこで、強制しないで、戻れる人から戻ろうというソフトな形に変えました」。

昨年四月には長崎大学の拠点村村内にできました。ここには保健師で

パッシングされるなど、本当にひどい状態でした。一五〇人くらいの大きな会場では大きな声の人ばかりがしゃべります。そこで、小さな会場で三十人ほど集まり、車座になって語り合う場が持たれるようになりました。これなら「いや、俺は本当はこんなことが心配で」と一人ひとりが自分の言葉で語ることができ

長崎大学の大学院生でもある折田真紀子さんが常駐しています。「とにかく一番説得力があるのは、彼女が、あの若さで村で生活していることです。外にいて時々通ってくるんじゃない。いつしよに村で暮らしながら住民の人たちの健康相談にのり、放射線の調査をやってくれる。それは『私がい

るんだから心配ないよ』という何より強いメッセージですね。不安を持つ女性やお母さんたちにとって、大きな存在になっています。一方で、帰村したのは高齢者が多く、村の高齢化はいつきに進みました。そんななか、保健学科の先生方による介護予防のサポーター養成や高齢者クラブの取り組みは、村の人たちに喜ばれています。川内村の帰村への動きは、どこよりも早く着実に進められ、周囲の自治体から復興へのモデルケースと言われ、注目されています。

りが自分の言葉で語ることができず。震災の年の十月、そこで高村先生が「放射線に対峙するには、まず情報を得て、怖がる場所は正確に怖がる、そうでないところには冷静に」とお話されました。それまでは、いくら国が「線量が下がった、水素爆発の可能性も低いので立ち入り禁止を解除する」といっても、もっと客観的な裏付けが欲しかった。そこで講演の後に、高村先生に「私たちは川内村に戻りたい。先生、村に入って線量を測ってもらえないだろうか」と依頼したのです。放射線の線量は、場所や環境によって大きく数値が変わると聞きま

「はい、除染にしても環境省のマニュアルができる前から実行し、勉強会も行ってきました。チェルノブイリの視察にも行き、復興のためにどんなインフラ整備が必要なのかを試し、小学校も再開しました。一年は実証田での稲作の放射線検査をし、安全性が確認されるなど、少しずつ成果が見え始めています。何が正解かは、やってみなければわからない。もちろん、うちの村の規模だからこそやれたこともあるでしょう。今後は、その成果や失敗を周囲の自治体と共有しながら進んでいきたいですね」。

長崎大学の動きも活性化されています。これまでの医学部以外にも、他の学部が関わることにについては、いかがでしょう。「小学校での子ども教室は、新しい動きですね。村に住むことの誇りを育むなかで、長崎が原爆からどう復

り禁止を解除する」といっても、もっと客観的な裏付けが欲しかった。そこで講演の後に、高村先生に「私たちは川内村に戻りたい。先生、村に入って線量を測ってもらえないだろうか」と依頼したのです。放射線の線量は、場所や環境によって大きく数値が変わると聞きま

興してきたかを子どもたちの目線で学んで欲しい。あれには私も参加して子どもたちからの質問に答えたのですが、大人たちが何を知り、何をやるうとしているのか、彼らなりに理解しています。復興の想いは次世代につなげていくことが重要。教育学部の学生さんたちが村に来て、子どもたちとふれあうことでの気づきもあるでしょう。高齢化が進む村で若い人の存在感はとても大きい。また都市計画や村づくり計画の提案など、いろいろな場面で包括的な連携ができるのではないのでしょうか。必要とされているところに足を運び、地域の問題に取り組むことで、また自分も学ぶ。

川内村の拠点は、長崎大学にとって学びの足がかりにもなっています。福島の復興の最前線に身を置くことは、これからの日本の未来を組み立てていくヒントになるに違いありません。

### 「長崎大学とは、 いろいろな場面で

### 包括的な連携が

### できるのではないのでしょうか」